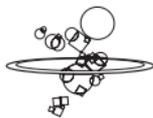

サイとドモンの怪奇取材メモ

高柳総一郎



夜光虫のランプ

Sai and Domon's Mysterious Interview Memo

by
Soichiro Takayanagi 2024

cover art and comic by Hisashi Akishina
DTP by Masaki TSU (t. m. production)

□ The red bride

「結婚するつもりなんですよ」

いつものように飲んでいると、ドモンがそんな切り出し方でとんでもないことを言い出してきたので、サイは指に挟んだタバコをどう扱ったものかわからなくなり、口もつけていないのに灰皿に先を押し付けていた。

今なんと言った？

あのドモンが、結婚？

そもそもドモンは常日頃から自分の過去というものにどこかうしろめたさを感じていて、何をやるにもどこか劣等感を抱いていた。そんなドモンが自ら進んで結婚するとは到底思えない。

「結婚って、誰とだ？」

「それは……まあおいおいということ。まず会ってほしいんですよ、君に」

サイは口につけたビールを吹き出しそうになるのをこらえながら、どうにか嚙下した。よりによって婚約者に会え、というのか。たしかに身内というものはとんといないドモンなのだから、それもまあ理屈として理解はできるが、サイにとつてはとにかく複雑だった。先に独身でなくなることへのやっかみとか、そういうのでないことは確かだろう。

「俺に会ってどうしろっていうんだ？ 奢れってわけでもないだろ」

サイはドモンの友人だと思っているし、本人からもそう認識されているとも思っている。おおかたドモンの相手に見合うのかどうかを判断させられるのではなからうか。そうだとすれば、自信は持てない。

「会ってあげてくれませんか？ 君のことを知って、どうしても会いたいなんて言われてんですよ。僕もその……会ってもらいたい、とも思ってます」

ドモンの口調はどこか切実で、サイはいよいよ困惑していた。ドモンが結婚を決めた相手だ。そうまで言われて、こちらも無下にはできない。

「まあ、そりゃあ別に構わんが……」

サイはそう答えるしかなかった。ドモンは安堵したように胸を撫で下ろすと、一気にビールを飲み干して、じゃ、と店を出て行ってしまった。引き止める間もない。サイはひとり残されたまま、しばらくビールをちびちびと舐めていた。

現実感が薄い話だ、となんども繰り返すたびに酔いが薄まっていくような気がして、サ

イは自然と次のビールを注文していた。

翌日、サイは一人でまたレッドドラッカーにやってきていた。ドモンは珍しく続いた宅配サービスの仕事が重なったとかで来られないと連絡があつたからだ。予定については待ってくれ、と言つてある。友人の頼みにすぐ応えられないのは申し訳無さでいっぱいだが、こればかりは慎重でいたかつた。

「サツちゃんさあ。別に考えることも無いっしょ？ 会つてあげればいいじゃん。あのドモっちが結婚するんだなんてめでたい以外に感想あるわけ？」

黒い肌カラフルなエクステを編み込んだコーンロウ。シンプルな白いパーカーとシヨートパンツの少女は、そう言つてオレンジジュースを啜つた。

彼女の名前はTJ。サイとドモンの共通の友人である少女で、かなりの人気を誇るマルチタレント系動画配信者でもある。

以前に巻き込まれたとある事件で知り合いになり、以降は年の離れた異性の友人として連絡を取り合つている仲だ。

「そりゃ、そうだが……」

「なら別にいいじゃん。それともなんか別にあるん？」

サイは答えに窮した。ドモンのことは友人として好きだが、その質問が意図するものかわからない。

「いや……まあ、別にねえけど」

TJはサイのその煮え切らない返答に溜め息を吐くと、空っぽになったオレンジジュースのグラスをテーブルに置いた。そして真っ直ぐにサイの目を見たまま言う。

「じゃあサツちゃんは、ドモっちが結婚しても平気ってわけだ」

サイはドモンの結婚を想像し、自分の生活にどのような変化をもたらすかを考えていた。今までのような付き合いはできるだろうか？

やつが考えているかどうかは別として、子供ができたら疎遠になってしまうかもしれない。

喜ばしいことだ。だが、その向こう側にいる自分の姿は想像できない。

「平気って言うほど割り切れちゃいない」

TJに訊かれてサイが絞り出した答えがそれだった。それが本音でもあった。すぐに割り切れるようなことじゃない。

「……なんか素直じゃなくね？」

「勘違いするなよ。ドモンの結婚は嬉しい。祝福するつもりだ。……だけど、あいつとは色んなことをしたし、命だって助けてもらったことだって何度もある。ただの友達の一言

で片付けられないくらい何度もだ」

「要は優先順位が自分より上になりそうだってスネてんじゃないね?」

TJがいたずらっぽく笑ったのに、サイはどこかバカらしくなってぬるくなったコーヒートを流し込んだ。

「そこまでガキじゃないぜ、俺」

TJはそれに「マジ?」と肩をすくめる。実のところ、彼女の言うところには一理あるのかもしれない。ただそれを直ちに認めるのは、なんだか自分のプライドが蔑ろにされたような気持ちだった。

しばらくのあいだ無言で時間を潰していると、不意に窓から視線を感じたサイが外に目を向けた。

レッドドラッカーの入り口横に立っている道路標識の側から、黒いカソックコートを着込んだ男が歩いてくる。彼が一瞬、こちらを見ていたのだろう、とあたりをつけた。

ドアベルを鳴らしながら、男は二人のテーブルの隣に腰掛け、コーヒートを注文するなり、こちらに話しかけていた。

「失礼ですがそちらの男性の方——いつも一緒にいらっしやる方は今日は……?」

「ドモっちのことかな? ごめんね神父様。今日はあたとデート中なんよ」

「そうでしたか。……弱ったなア」

神父はそれだけ言うとか何か探すようにそわそわと視線が揺れていたの、サイはできるだけ穏やかな口調で訊ねてみることにした。

「……ドモンは俺の連れですが、あいつ何かしでかしました？ 確かに変なところもありますが、神父様にご迷惑をかけるようなやつじゃないはずですか」

サイの言葉に神父は柔和な笑みで首を横に振った。美形である。栗色のウェーブがかつた髪の色男だ。こんな人間もいるのだなあ、とサイは妙な得心をしながら、彼の返事を待った。すると、その神父はなんとも言いづらそうな面持ちで、妙な言葉を押し出した。

「……まずいことになるぜ」

「はあ？」

神父はコーヒーが来たのを見計らってマグカップを持ち、とうとうサイとTJのいるテーブルへと移ってきた。嫌な予感しかなかった。

「……まずは自己紹介だ。俺ア、イオってもんだ。見ての通り神父でな。窓から丁度見えんだろ。あそこの所属だ」

急に碎けた口調になったイオに面食らいながら、二人は釣られるように指の先を見た。その先にあつたのは、オールドハイト市で一番の歴史を持つ教会である『セント・オールドハイト大聖堂』であつた。

「へえー。神父さん、エリートトじゃん」

「ありがとよ。だけど今はそりゃあどうでもいい話でな。嬢ちゃんは、オールドハイトがヤバイ街だったのは知ってるか？」

TJはサイと顔を見合わせた後、そう驚いた顔でもなく、眼の前のジュースのストローをはずすと、嚙りながら頷いた。

「この街は何でも来る。世界中の犯罪組織。都市伝説。オカルトじみた超科学。……霊的存在にヨーカイもなんでもござれだ。俺もまあ神父やりながらちよつとワルに片足突っ込んでたクチだが、今は真面目に神に仕えてる。だが最近どうにも妙なことがあってな。コイツを見てくれるか」

神父が取り出したのは、赤い封筒だった。金の箔押しで枠が象られており、辛うじて漢字のような何かが印刷されているのがわかる。

「何これ？ 中国のなんか？」

「正確には台湾って場所のもんだ。先日うちの教会に、ヴァチカンから警告があつた。『拾わせるな』ってよ」

「ヴァチカンって、あのヴァチカンか？ カトリックの本部の。メッセージはそれだけ？」

「そんだけだ。俺もそれなりに神父をやっちゃいるが、ヴァチカンから名指しで警告がくるのは初めてでなア。そこで何人か抱えてる実働隊に、回収を命令した。なんとか八つま

で回収できたが、あんたの連れがひとつ拾っちゃまったッてわけだ」

「で？ この封筒は一体なんなんだよ」

「それがよ……分かんねェんだ」

「なにそれ」

「大体この封筒がここにある時点で、俺もあんた達にも何も起こっちゃいねェ。こいつはただの赤い豪華な封筒なんだ。……ただヴァチカンからはそれ以上の情報はなくてな。ま、高度な政治的判断だとかなんだで、あんまり芯を食ったことが言えねえと見たな」

イオは封筒を懐に戻した。

「で、そんな封筒の最後のひとつをドモンが拾ったと」

「そういうこつた。ヴァチカンが警告してくるってことはイコール『ヤバイ』ってことだ。そこに疑いはねェ。うちの実働隊も奴さんのお陰で……そうだな、病院送りだ」

どこか含みを持たせた言い方に、サイは首を傾げたが——元殺し屋のドモンが襲撃者を生かして帰るとも思えなかつた。彼なりの気遣いだったのか、それとも。だがサイは新聞記者として真実を求める性根からか、次の瞬間には答えを引き出そうとしていた。

「……殺しちゃまったのか、あんたんとこの人」

「いやー……まあ死んだと思った、とは言ってたなア。うちの実働隊はシスターなんだがな。プロレスラーも裸足で逃げ出すタマよ。医者も良く生きてたつってた。まあ常人な

ら即死のとこだったってだけだ。気にすんな。ハナから首根っこ押さえようとしたこっちにも非はあらア」

「……」

サイは何も言えなかった。わざわざ神父に、ドモンの正体を懇切丁寧にするのもおかしな話だからだ。まあ、ヤツのことだから後ろから掴みかかれて本能的に斬り殺そうとしたのだろう。なんだか申し訳なくなってきたサイを尻目に、TJは身を乗り出して尋ねた。「……それよりもさあ、ドモっち呼び出したほうがいいんじゃないかね？　結婚するとか言つてっし、あんま余計なトラブルにしちゃ可哀想っしょ」

「へえ？　結婚か……式場は決まってるのかい？」

にわかにもドモンの結婚が真実味を帯びてきた気がして、サイはまたしても複雑な——眼の前で渦を巻いているコーヒーとミルクみたいな気持ちになって、そんな自分に落ち込んだ。

「いや、俺達も聞いたばかりで。相手の顔も知らないんだ。今度会わせてくれるとは聞いてる」

「だったら、こんなことを聞かせた詫びにうちの教会で結婚式をやるといいぜ。時代だけはついているからな。泊もつくだろ。……ともかく、本人と連絡がついたら俺にも連絡をくれねエか。それまでにヴァチカンにツテのあるダチ通じて、封筒のことについちゃ調べと

く。それまでは、そのドモンってのの様子を見といちゃくれねえか」

神父が教会へと帰り、TJも夕方前には去っていき——サイはレッドドラッカーの扉を押し開けて、交差点の車行き交う喧騒を目の当たりにして、ため息をついていた。

とりあえず今日は帰ろう。それによくよく考えたら、レッドドラッカーでもコーヒーしか頼んでない。腹も減った。

冷凍食品でワツフルくらいはあっただろうし、今日はもう何もやる気がしない。幸い締め切りを抱えていないから、とにかくなにか腹に詰め込んで今日は寝てしまおう。そう考えた彼は、スマホが震えているのに気づいた。画面に表示されているのはドモンの名前。サイは指の先で動揺しつつも、電話を繋いだ。繋いだあとにどんな気持ちで何を喋ればいいのか全く考えていなかったことによく気づき、気まずくなりながらも「もしもし」と言葉を押し出した。

『やあ、すみませんね。昨日はびっくりさせちゃって』

「お前にその自覚があるなら俺も救われるよ」

『お詫びと言っちゃなんなんですがね、今日このあとメシに行きませんか。『彼女』にもそれくらいはしたら、って言われちゃいますね』

彼女、か。そういえば、その彼女とやらの名前も聞いていなかった。妙な封筒を拾って相手を殺しかけたなんて話も初耳だ。少し話をしなければならぬし、なにより腹も減っている。渡りに船だった。

「助かるよ。実は昼飯もまだなんだ。だがレッドドラッカーで管巻いてた手前、別の店だと助かるんだが」

サイの言葉に電話口の向こうで、ドモンはくつくつ笑った。

「もちろんです。いいバーガーを出す店があったんで、どうです？ レッドドラッカーかなら、地下鉄乗って二駅のところにありますから。近場まで来たら教えてもらえますか」

「わかった」

言われたとおりに地下鉄を二駅乗って、駅の階段登ってすぐ、八十年代風の古めかしいネオンが気だるそうなバーガーショップがくだんの『C's』だった。時刻は夕方六時前とあったところだ。土曜の夜突入直前、それなりに混み合っている。いつもの黒いジャケットを着たドモンが手を上げて、こちらへアピールした。

「お前に店を教わるとはな」

「僕もそれなりに文化を学んだということですよ。ちなみにここはアボカドバーガーセツトがおすすすめです」

「勉強熱心で何よりだ」

運ばれてきた水を、手持ち無沙汰から一気に飲み干す。なんだか落ち着かない。目の前にいるドモンの顔もまっすぐ見られないような気がしたが、彼は改めて眼の前に座るドモンの顔を見た。

別に代わり映えはしない、いつもの眠そうな顔がそこにはあった。目の下には消えなさそうな濃い隈。右側の隈のその下には、黒い点が刻まれていた。

ほくろだ。

そこまで認識して、サイはメニューを持ってきた店員に気を取られた。アボカドバーガーに思考が上塗りされ、注文後しばらく二人は無言のままだった。

ビールと共にバーガーが運ばれてきて、そこでようやくサイは話を切り出した。

「なあ、お前——最近妙なものを拾わなかったか？」

「妙？ 妙ってなんです？」

ドモンは栓を抜いて、持ち上げてすらいらないサイのビールにかちんとぶつけてから乾杯を示して口をつけた。

「いや実はな。レッドドラッカーの近くに教会あるだろ。あそこの神父様の知り合いが、お前が封筒を拾ったって言うんだ」

「ああ、そんなこともありましたね……見上げるようなデカイシスターが立ってまして、流石にビビっちゃいますよ、その」

「安心しろ、シスターは生きてるってよ。……別に気にしてないとも言ってた。お前、一回謝りに行ったほうが良いぞ」

「国際問題になっちゃいませんか」

その言葉にサイは、思わず笑ってしまった。ドモンの口が減らないのは、いつものことだ。だが、そんな冗談が言えるということは、少なくともこの封筒については何も気にしていないのだろう。

それにしたって、だ。

あの神父も言っていたように『ヴァチカン』から警告が来るなんて物騒な封筒には、何が入っていたんだろう？

まさかヴァチカンがドッキリを仕掛けるなんてことなんてありえないから、中身のある『なにか』であることは間違いないはずだ。サイは改めてそう分析し直すと、バーガーを一口かじり——たしかにうまいバーガーだ——置いてから、ずいと鼻先をドモンに向けた。

「どうしたんですか？」

「お前、封筒はどうしたんだ？」

「捨てましたけど」

「捨てた!？」

サイは思わず叫んでしまった。テーブルに向けられた好奇の視線が痛いほど浴びせられ

たのがわかる。椅子を可能な限り小さく動かして姿を消したくなる気持ちを抑えながら、コップの氷水を一口含んで落ち着きを取り戻してから聞き返す。

「わざわざ拾ったんだろ？ ……それにお前、シスターを半殺しにしてまで手に入れたやつなんだろ？ ……なんでそんな……」

「彼女だって僕を半殺しにしようとしてましたし、悪いとは思いましたがね。大したものが入ってなかったんですよ。ただの豪華なゴミ入れだったのかもしれないですけど、まあとにかく僕には不必要なものでしたから、すぐに捨てちゃいましたよ」

いつの間にかバーガーを食べ終わったドモンは、残ったソースにポテトをディップしながら、事もなげに言った。最悪だ。しかし、何が起こったわけでもなく、封筒自体になにかあったわけでもないというなら、ヴァチカンは何を気にしていたんだろうか。

「じゃ、じゃあ中身はなんだったんだよ？」

「だからゴミですよ。埃とか、髪とか、なんか月の形したプラスチックとか。気持ち悪いです。すぐ捨てたんです。それで終わりですよ。君、一体何を気にしてるんです？」

ポテトをソースにディップする、というのを真似して口に運びながら、サイは再びドモンと視線を合わせた。黒ぐるるとした光のない瞳が、こちらを射抜いていて——すぐ下のほくろにまた意識が向かった。

……ほくろ？

サイはくにと湿ったポテトを咀嚼しながら、疑問符を浮かべた。

こいつ、ほくろなんてあったか？

男の顔をジロジロ見る趣味はないが、彼の顔はうんざりするくらい見ている。ここ最近で一番長く過ごしている人間なのは間違いない。だから断言できる。

「なあ、ドモン。お前——」

「あつ、すみません！ 実は『彼女』が待つてるんですよ。夕飯済ましたらすぐ帰って来いって。いやあ、呼びつけといてすみませんねえ」

そう言うや否や、ドモンは残ったトレーを片付けると席から立ちあがって伝票に手を掛けていた。突然場から消えた彼に慌てて立ち上がろうとするが、存外にはやい。こんなにやつがキビキビ動くようなことがあったか？

「おい！ ちょっと待ってくれ！」

ドモンはほくろの上の目を少し笑顔に細めながら、ひらひら手を振って姿を消した。サイは席に座り込むしかなかった。何が何だかわからない。

やつにほくろなんてなかったはずだ。それに——出ていくやつの左目にもほくろがあった。た。

ほくろはそんなに短時間で増えるものだろうか？

あいつの目の下に現れたほくろは一体何だ？

ざわつき始める脳内の中でサイは居ても立ってもいられず、TJへ電話をかけていた。

『ほくろ？』

「そうだ。絶対に変だろ。人間のほくろがメシ食ってる最中、三十分そこらで増えるわけがない」

『そりゃサツちゃんの言う通りだと思っけどさ。封筒、もう捨てちゃったし大したもの入ってなかったんでしょ？ とりあえず神父様に言っいたらいんじゃないかね？』

「まあそりゃそうなんだが……」

『実は今日生配信やる予定でさ。ホラー系のヤツ。けっこそいうのに詳しい人集まんの。そこで聞いたといたげるから。それに』

「それに？」

『今の段階でドモっちのこと気になんの分かるけどさ。信じたげたら？ 友達っしょ？』
なんとも言えない気持ちになりながら、サイは電話を切った。友達を信じる。当然のことだ。だがこの違和感は何だろう。

神父イオにメッセージアプリでほくろの話と封筒は捨てたという話を送ったあと、サイは地下鉄駅のベンチでため息をついて頭を抱えていた。

ふとスマホを見直すと、今度はドモンからメッセージの通知が来ていた。

『明日、十四時にレッドドラッカーの奥の席を予約してあります。そこで顔を合わせましょう』

何を意図しているのかは明白だった。彼女を連れてくるつもりなのだ。

一体どんな顔をして会えばいい？

そんなことを考えていると、後ろ側の電車がホームに滑り込んできて、サイの前髪を持ち上げた。

同時に、彼は顔を上げた。

「そうだ。『誰』なんだ？」

別にドモンを四六時中監視している訳では無いにしろ、少なくとも先週くらいまでそんな素振りは一度もなかった。プライベートだって、メシはこっちが忙しくない限りレッドドラッカーと一緒に食っている。そんなカモフラージュが都合良くできるものだろうか。暗殺以外のことはてんでダメなヤツなのに。

結婚を考えるほど好きになった人間のことを、こちらに悟らせないなんてこと、できるだろうか？

「……何かあるな」

サイの記者ならではの勘が——そうあってくれ、という打算的な面も含めて——働いた。